

国際ロータリー第2790地区
東金ロータリークラブ会報
2007年平成19年1月16日 第46号 第259 号誌2813号

2006-07年度 国際ロータリーのテーマ

率先しよう

創立 1959年(昭和34年)9月15日
RI 承認 1959年(昭和34年)10月17日
例会日 火曜日 12:30~13:30
例会場 東金商工会館 4階

R I 会長 ウィリアム・ビル・ポーツ
ガバナー 白鳥 政孝
ガバナー補佐 菅井 直秀
会長 秋葉 芳秀
幹事長 尾 邦俊
クラブ広報委員長 山本 忠司

第2313回例会 1月16日 12:30点鐘 会場 例会場

今週の合唱= 手に手つないで

開会宣言と点鐘 お食事 会長挨拶 幹事報告 誕生・結婚祝
委員会報告 卓話 並木 孝治 会員
出席報告とニコニコ BOXの発表 閉会宣言と点鐘

***** 前回の記録 (1月9日) 東金ビューアRC新年合同例会 *****

会長挨拶 秋葉 芳秀 会長

皆様、新年おめでとうございます。
東金RCは、昭和34年9月15日の創立で、今年で47年目、本日で通算2312回例会を迎えることができました。

一方東金ビューアRCは平成12年2月1日の創立で、通算368回例会になるそうです。両者の年齢差は41年ありますが、余程のアクシデントがない限り、この差は永久に縮まりませんし、開くこともあります。

「竹は親よりも成長良く、そのしなやかさは風雪に強く、且つ子孫繁殖力に於いては竹に勝るものなし」と言われます。

東金ビューアRCの皆様には、この若竹のように成長されますことを、親クラブとしてご祈念申し上げます。

もちろん東金RCも老化することなく、「常に青春」であるよう努力をし、奉仕活動を展開して参ります。今後も、白鳥ガバナー、菅井ガバナー補佐を始め、多くの方々のご指導を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

さて、本日の「斎藤健」氏のご講演、充分ご満足いただけたと思います。

「転落の歴史に何を見るか」(ちくま新書337)とい



う本を、皆様全員お読み頂きました。その著者である方から直接お話を聞くことができ、大きな感動をお受けになったと存じます。更に白鳥ガバナーのご参加まで叶い、こんなに嬉しいことはありません。

なお、本日は5名の方が東金RC会員のお口添えの下にロータリー体験をなされました。初めての体験だと思いますが、ロータリークラブは人と人の交流で成り立っております。

皆様とお会いできたことを大切にしなければなりません。これからも、末永いお付き合いを願う次第です。

以上で挨拶を終わります。ありがとうございました。

ゲスト

- ・白鳥 政孝 ガバナー、
- ・常泉 健一 情報委員会委員長、
- ・三木 敏靖 地区大会委員長、
- ・菅井 直秀 ガバナー補佐、
- ・土屋 俊夫 ガバナー補佐幹事、
- ・クオン ミチ 米山獎学生

出席率

会員	出席者	出席率
34名	34名	100%

新春記念講演会 斎藤 健 様 単戦開戦史に見る“今”

新年明けましておめでとうございます。
2007年初頭というものが、歴史の中でどのように

位置付けられるのか。

現在は、明治維新、敗戦に次ぐ第三の改革の時代と言われます。

我々はいかなる時代を生きているのか。どういう時代認識を持ちながら迎えるべきか。

1984年に出版された「失敗の本質」は、意思決定のメカニズム解析、組織内での上司と部下のやり取り、個々の決断の裏にある葛藤など、組織人であるならば常に頭を悩ます事柄が実際にリアルに描かれている。

この話の深刻なところは、旧帝国陸海軍という言葉を現在の具体的な組織の名前に置き換えると、今でも同じような現象が繰り返されている。

真珠湾の奇襲によって世界の海戦が航空戦の時代に突入していることを日本軍自らが証明しておきながら、なにゆえ、戦艦大和に寄りかわり続けたのか。

長年苦労をさせてきた水兵に、「もう君らの時代は終わった、これからは飛行機の時代だ」とは言えなかつた(源田実氏) つまりところ、水兵の失業問題。

これは過ぎし日のことではない。例えば、英会話なくして国際ビジネス戦争を勝ち抜くことは難しいが、依然として日本の英語教育は読み書きが中心である。読み書きしか教えることができない英語教師の失業問題が、日本としての戦略よりも優先している。

「何か物事の本質か」これを議論し突き詰める組織風土を維持し続ける。

日本の組織は、創設当初は独創力もあり人事も柔軟で、優れた対応能力を示すが、時間がたつにつれて意思決定がゆがんでくる。人間関係や過去の経緯など本質的でないことをよりどころとして、重大な判断が行われる。

1905年日露戦争の奉天会戦のときの日本と、1939年のノモンハン事件のときの日本を比較すると、日露戦争のときは総合戦略があり、しかも、リアリズムに基づいた。海軍との統合的運用、情報重視の戦術発想、機関銃や下瀬火薬に見られるような最高水準の武器へのこだわり、明石大佐のロシア革命支援活動(当時の国家予算の0.4%を一人で使う)、開戦当初から終戦を意識した米国大統領への働きかけ、国際市場での戦費の調達。マッカーサー曰く、「同じ国の軍人とは



思えない。」ショックなのは、奉天の会戦からノモンハン事件までわずかに34年。34年で別の国。

転落の要因は四つ。

ジェネラリストの喪失(指導者層の変質、世代交代)、道徳的規律の喪失、歴史がなかった、組織の変質。これらこそ、より普遍的な原因ではないかと考えた。

第一の指導者層の変質 世代交代は武士の末裔から近代軍事教育を受けたスペシャリストの軍人との違い。

日露戦争は元勲たちが指揮を執った最後の戦争。その後の歴史は近代軍事教育を受けた軍人が次第に歴史の舞台に躍り出る。一時期、大正デモクラシーと言ってもてはやされた政党も、傑出した政治家・原敬を最後にジェネラリストの入材不足を露呈。

日本は人材がいないと言われるが、人材がいないのではなく、育てていないだけではないか。

二つ目は、道徳律の喪失。最後のところ、私より公を重視して踏みとどまる精神。

三つ目は、歴史がなかった。

日露戦史編纂時の通達。以下の記述を禁止。

- 一、食料不足に陥った事実
- 二、部隊や個人の臆病な行為
- 三、高等司令部幕僚の執務に関する事実

昔話と言って済むか。翻って、第二次世界大戦の正確な歴史を我々は持っているのか。

自信過剰と自信喪失の裏返しの同じ誤り。

四つ目は、組織の変質。

さまざまな点が指摘される。陸海軍という組織は、結局、自己改革力を発揮できなかったということ。

この四つは、今の我々が抱える問題であった。

明治は改革を繰り返し、日露戦争の勝利でピーク。その後38年。戦後38年といえば、1983年ごろ。85年のプラザ合意。一人当たりGNP世界一に。やはりこの辺がある種のピークと思われる。その後しばらくして、90年代の失われた10年。

21世紀前半の日本が20世紀前半と同じように転落の歴史をたどるか、あるいは復活の歴史を刻むのか、答えは、この10年の過ごし方にある。